

朝日地球会議 2020

2020年初頭から世界に瞬く間に広まった新型コロナウイルス感染によって、10月に開催した国際シンポジウム、朝日地球会議もオンライン化を余儀なくされました。海外や地方在住の登壇者は弊社内に設けたスタジオではなく自宅からオンライン参加、スタジオでの登壇者はアクリル板で仕切ったテーブルに並んでももらいました。



これまでのように会場での来場者とのふれあいはできません。しかし、オンラインのもたらした恩恵は思いの外大きいものでした。申し込み者数は事前登録が1万2400人と過去最多に。実際の視聴者数は、ブライトコープのべ2万6千人、ペリスコープのべ46万人を記録しました。全国47都道府県から、海外41カ国・地域から、また、学校単位での参加、大学の課題に使われるなど、嬉しい報告がありました。

オンライン化は、海外からの登壇者が参加しやすい効果もあったと思います。往復や滞在の時間、航空機手配、ホテルの確保など物心両面での負担はなくなりました。時差に配慮した収録、ネット環境の確認やリハーサルはしましたが、本番でのトラブルはありませんでした。

視聴者への事後アンケートでは、オンラインを歓迎した人が94%にのぼり、特に海外や地方から「今後も是非オンラインで」との声が寄せられました。都内の会場で開いていたときは、海外や地方から、これほどのニーズがあることに気づけていませんでした。

コロナは、コンテンツへの影響ももたらしました。思いもよらぬ世界的なパンデミックは、人々の自然や環境への関心をこれまで以上に高め、SDGs(国連の持続可能な開発目標)や環境問題を取り上げるセッションが増えました。

5日間を通じて31セッションを設けましたが、そのうち、環境やSDGsをテーマにした主なセッションは以下の通りです。

まず、SDGsPeople に選ばれたタレントのんさんと国連広報センター根本センター長が語り合う「SDGsしないのん」。

2日目は「コロナと気候危機」。ポール・マデン駐日英国大使の「いまこそ野心的な目標を」とのメッセージに続いて、環境活動家でモデルの小野りりあんさん、東京大教授の高村ゆかりさん、国際金融情報センター理事長の玉木林太郎さんが、温暖化政策を巡り世界と日本はどこに向かうのか、続いて企業人が参加し「復興へ向け企業はどう取り組むのか」を議論しました。



3日目は、アメリカの「テラサイクル」創業者トム・ザッキーさん、インドネシアでプラスチック袋とストローの使用禁止を実現したメラティ・ワイゼンさん、地球環境戦略研究機関主任研究員の栗生木千佳さんが、国谷裕子朝日新聞SDGsプロジェクトのエグゼクティブ・ディレクターと「サーキュラーエコノミー(循環型経済)」を語り合いました。テラサイクルは、これまでゴミとして捨てられてきた日用品の容器などを回収して再利用する「Loop」という事業を世界各地で進めており、日本でも多くのメーカーが参加しています。

そのほか「フードテックと持続可能社会」「あの石が、あのゴミが資源になるなんて!」「地球の課題解決への挑戦 あなたの行動が未来をつくる」「気候変動と生物多様性」「クリーンに、スマートに〜すぐそこまで来ている水素社会」などなど、コロナ禍でも着々と進む気候危機、環境破壊をどう食い止めるか、企業人や研究者が話し合い、対策案を出し合いました。もちろん環境問題以外でも、コロナでさらに浮き彫りになったと言われるジェンダー問題、人々の分断、文化の意義、民主主義のあり方、子どもの居場所作りなどをとりあげました。

オンラインの特性を生かすために、SNSでフォロワーの多い人に登壇いただく試みをしてみたら、目に見える効果がありました。ユーチューブの人気者、水溜りボンドの登壇を発表すると、10代20代がSNSで勢いよく拡散してくれたのです。地球会議始まって以来の若年層の増加につながったことは間違いありません。

朝日地球会議2020の登壇者の女性割合は41.7%と、前年の35.8%を上回りました。朝日新聞社は20年4月に「朝日新聞社ジェンダー平等宣言」を発表し、朝日地球会議のような主要主催シンポジウムでの男女どちらの性も40%を下回らないことを数値目標として掲げており、それを初年度でクリアすることができました。女性の申し込み者数が初めて男性を上回りました。